



epooca

エポカ vol.129

静岡県男女共同参画センター・あざれあ情報誌

2017年12月号

ジェンダー

特集

とこ
とばと

!

あたくし、

泣いてなんかないぜ!

オレ、

うれしいのかしら?



この人に聞く！

熊谷 滋子さん（静岡大学人文社会科学部教員）

★「女ことば」・「男ことば」・ジェンダー

文法書では「日本語には性差があります」と記載されていますが、「女ことば」を実際に使っている人は思っているほどいるわけではなく、主に小説やテレビドラマなどのフィクションの登場人物や、芸能界の特定の人物特徴を持たせた、いわゆる“おねえ系”の人などが使っているものが中心的なのではないかと思っています。

私は岩手県出身で東北方言の中で育ち、まわりには誰も「女ことば」を使っている人はいませんでした。東北方言では、「おれ」や「おら」などは男も女も使いますし、一般的にも日本の方言にはあまり男女差がありません。そのため、小さいころ、小説やテレビドラマなどに使われている「女ことば」を読んだり聞いたりすると、それらは東京の人たちの話す言葉ではないかと思っていました。そのうち、東京に足をのびしてみても、「…だわ」や「…かしら」などのいわゆる「女ことば」を実際に使う人はそれほどいないということに気づくようになりました。そうすると、文法書でいうところの言葉遣いの男女差というのは、日本国民の全員が使用している言葉遣いではないと認識するようになり、同時に疑問をもつようになりました。

歴史的にみると、少なくとも小説などでは、江戸時代までは、男女共に「…だぜ」とか「…かしら」などの言葉遣いをしていて、男女の区別はなかったと言われています。それが明治時代、近代国家の政策によって、標準語が作られた後、西洋の発想である男性女性といった二項対立的な発想も取り入れられ、女は女らしく、男は男らしくという要請のもとに、「女ことば・男ことば」というものも形成されていったのです。もともと日本では古くから、男女を区別した諸々の制度をつくってきたわけではありません。例えば“混浴”などの文化も当たり前がありました（今でも温泉によってはあります）。近代西洋文化の影響により“混浴”は“野蛮”なものだと考えられるようになったにすぎません。つまり男女差を敏感に感じるよう意識させられるようになったのです。

なぜ、それほど実際に日常会話ではあまり使われていない「女ことば・男ことば」が、現代でも有効なものとして、あるいは違和感をもたず、受け入れられているのでしょうか。その理由の一つとしてすぐに思い浮かぶのは、“女は女らしく”、“男は男らしく”というジェンダーがことばの面でも深くしみ込んできているからではないかということです。“女らしさ・男らしさ”というのは結局、“しつけ”みたいなもので、それが言葉の上にも現れているのです。男性が発すると気にならない言葉も、女性が同じ言葉を発すると違和感を持ち、“女らしくない”と感じるのは、“女はこうあるべき”というジェンダーに縛られているせいなのです。さらに、フィクションなどのメディアに、現実とギャップがあるくらい「女ことば」が強調されて使われているのは、メディアもそのようなジェンダーをずっと根っこにもち、あるいは逆につくりあげ、そして再生産しているということです。むしろメディアが私たちのジェンダー意識に大きな影響を与えていると考えています。

特に、外国文学や映画などの翻訳や字幕などをみると、完璧な「女ことば」が使用されているのがわかります。例えばM・ミッチェルの『風と共に去りぬ』では、殺人まで犯して生き抜く強い女性スカーレット・オハラやH・イプセンの『人形の家』では、離婚して独り立ちしていく女性ノラが描かれていますが、日本語の翻訳は「…だわ」、「…かしら」などの「女ことば」のせいで、せっかくの力強いセリフも弱々しいイメージを与えてしまいます。つまり、力強く生き抜く、自立した女性のことが「女ことば」で翻訳されることで、従来の女らしさをもった中途半端な性格を帯びてしまうことになってしまうのです。こういった、フェミニズムの視点を持つ文学やジェンダー絵本などに「女ことば」が使われているのをみると、違和感を持たざるを得ません。

文学や絵本などは、子どもたちが言葉を学ぶための手本となります。日常生活では実際に使っていないくても、様々な場面で「女ことば」に出会うことで、それが現実の生活に跳ね返ってきて継承されていくのです。女・男はこう話すべきという作られたイメージが無意識のうちに教えられ、育っていくことになるのです。

方言に男女差があまりなくても特に問題ありませんでした。標準語とその女版「女ことば」あるいは男版「男ことば」が望ましい日本語であるという見方は非常に窮屈です。“女だからこう話すべき”ではなく、個人として、こういう話し方をしたいと思ったら、それができるようになるといいなと思っています。





『女ことばと日本語』
(中村桃子 岩波書店 2012年)
「日本語には、なぜ女ことばがあるのか」をテーマに、鎌倉時代から第二次世界大戦後までの歴史をたどっていきます。100年以上も前から“最近”の女性の言葉づかいが嘆かれ続けていることなど、各時代の資料から明らかにしています。



『翻訳がつくる日本語：ヒロインは「女ことば」を話し続ける』
(中村桃子 白沢社 2013年)
どうして、海外小説のヒロインは日本女性よりも女らしい日本語で話しているのでしょうか。本書では、洋画や海外ドラマ、翻訳小説などを取り上げ、女ことば・男ことば・方言に注目して、その傾向や日本語との関係を見ていきます。

★あざれあのクリスマス！

日時：12月1日(金)～25日(月) ※3日、17日は休館日
場所：あざれあ2階ロビー、あざれあ図書室

●クリスマスツリーの飾りつけ
あざれあ2階ロビー(図書室入口前)にクリスマスツリーが登場。あなたの「今年、うれしかったこと」を書いて、ツリーを飾りつけてくださいね！



●工作ワークショップ
「雪の結晶を作ろう！」

12/2 12/16
14:00～15:00

昨年好評だった室内飾りの“雪の結晶”。簡単にできる、大人っぽくて素敵なオーナメントを作ってみませんか。参加費は無料、申し込みは不要です。

●ピース・キャンペーン

あざれあ図書室の本・雑誌や映画など、いつもの2倍借りられます！コミックの大人借りもおすすめてです。本は5冊→10冊 DVDは2本→4本 ※貸出期間は2週間です。



あざれあ図書室 利用案内

貸出：図書5冊、ビデオ・DVD2本(2週間)
開室時間：月～金 9:00～18:00 土日祝 9:00～17:00
休室日：第1・3・5日曜日、図書整理日(12/26)、年末年始(12/27～1/5)
TEL：054-255-8763 / FAX：054-255-8759

男女共同参画社会づくり 宣言事業所・団体

浜松ホトニクス(株) (浜松市)

宣言事業所・団体 1,536件
(平成29年11月15日現在)

●“光”を通して理想の実現を目指す

1987年、超新星爆発からのニュートリノ観測を成し遂げたカミオカンデ。この装置に浜松ホトニクス社の光電子増倍管が使われていることを知る人も多い。1953年設立当初から一貫して“光”をキーワードにさまざまな研究・製造に携わり、目に見えないところで、私たちの暮らしや環境、産業を支えている光のエキスパート集団が浜松ホトニクス(株)だ。

建部益美さんは、浜松市内にある研究所で光バイオの研究に従事し、創薬や医療分野での応用が期待される光感受性タンパク質を用いた細胞機能の光制御に取り組んでいる。将来的に遺伝子治療が可能になると、局所に光を当てることで身体のある機能を回復させることができるなど、光を使って生体のさまざまな作用を操作できるようになるらしい。



建部 益美さん

12才と8才の2人の娘の母親でもある建部さん。半年余りの産休育休を経て職場復帰し、子育てしながら13年間浜松ホトニクス社で研究を続けている。一般的に日本では女性研究者が研究を継続しにくく、結婚・出産などのライフイベントがキャリアに与える影響が大きいと思われる。「私は産休育休で一時的に職場から離れることに不安はありませんでした。育休中も研究内容について考えたり、子どもが寝ている間に論文を読んだりし、また家族や会社の理解もあり速やかに復職できたと思います。当社の研究職は専門が細分化され、業務内容がそれぞれの研究者に特化しているという部分も復職を妨げなかった面があるといえます。研究分野で女性の参画を阻む要因として、師事する教授や上司に女性がほとんどいないことや、ポスドク制度(任期があるため任期中の出産・育児が難しい)、女性は結婚したら仕事をやめるだろうという考え方など、日本の伝統的な慣行が背景にあるのではないのでしょうか。当社は、子どもが熟を出した時など急な欠勤にも柔軟に対応してくれ、子育てに関するサポートが充実しているので非常にありがたいです。」



安井 恵行さん

総務部人事グループの安井恵行さんは語る。「当社の産休育休後の復職率は100%です。また、男性の育休取得者も数名おります。その他に、通常有効期間2年の有給休暇を、「積立保存休暇」として繰り越すことを認め、社員が家族の介護や看護のためにこの保存休暇を使うことができるという制度を導入しています。男女の区別なく優秀な研究者・技術者を採用し、それぞれの社員が十分力を発揮できるよう社内の制度や環境をこれからも改革していきたいと考えています。」

仲本 律枝さん (RICCI EVERYDAY 代表/静岡市)



★人生の新ステージへ踏み出した熟年女性の星

色鮮やかで大胆な柄の布製バッグ。その布柄のユニークさにエネルギーが満ち溢れている。これらを製作しているのは東アフリカの小国ウガンダのシングルマザーたちだ。

仲本律枝さんは2年ほど前、娘の千津さんに「一緒にやってみない？」と誘われウガンダ製布バッグを販売する会社を立ち上げた。千津さんがウガンダの首都カンパラの工房でシングルマザーたちと共に作り上げた製品を律枝さんが日本へ輸入し販売している。

律枝さんはそれまで職業経験ゼロ。大学卒業後まもなく結婚し、40年近く専業主婦として4人の子どもの子育てや、その他家族のサポートに追われてきたところにいきなり

バッグの営業を任された。母親の可能性に賭けた娘千津さんの洞察力もさることながら、その期待に応える母律枝さんのバイタリティもすごい。PTA活動などで培ったコミュニケーション力とマネジメント力で徐々に市場を開拓し、今では全国の百貨店などを回り自ら販売の店頭立つ。

ウガンダでは最高峰の大学を卒業したとしても就業率が30%を下回り、高等教育を受けていてもなかなか就職先がないという現状がある。ましてや、何らかの理由で教育を受けることができなかった人たちはまともな職に就くことができず、貧困の連鎖を断ち切ることが難しい。特にシングルマザーたちにとって生きていくことは過酷だ。中には食べていくためにセックスワーカーにならざるを得ない人たちもいる。律枝さん・千津さん母娘は、そんなシングルマザーたちを雇い入れ、彼女たちが作るバッグを売ることによって彼女たちが経済的に自立でき、貧困から抜けだせるよう背中を押す。

会社を立ち上げて2年余り。今年7月、律枝さんは初めてウガンダの地を踏んだ。60歳にして新たな地平に足を踏み入れたことに、「まさか人生にこんなことが待っているとは！びっくり！」(笑) “人生、何か新しいことを始めるとき遅すぎるということはない”ということを体現している律枝さん。札幌に単身赴任中の夫や、高齢者施設に入所する義母など家族の理解があるからこそ、日々めいっぱい働けるのだと感謝している。そして、ウガンダのシングルマザーたちにも“人生、何が起るかわからない”希望のある未来を託す。



高い縫製技術を持つウガンダ女性、丁寧にバッグを仕上げている

あざれあ相談

悩んだとき、困ったときには、あざれあへ

女性相談

すべて女性の相談員、医師、弁護士による相談です。安心してお電話ください。



0558-23-7879 賀茂
055-925-7879 東部
054-272-7879 中部
053-456-7879 西部

※混み合う場合がございます。時間をあけておかけ直してください。

月・火・木・金 9:00～16:00

水曜日 14:00～20:00

第2土曜日 13:00～18:00

※いずれも日・祝を除く

面接

要予約・託児つき・無料
あざれあ女性相談の番号におかけください。

| 月 | 火 | 水 | 木 |
|-----------------------------|--------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| DV・ その他暴力 10:00～15:00 | 第3 弁護士相談 13:00～16:00 | DV・ その他暴力 14:00～19:00 | DV・ その他暴力 10:00～15:00 |
| | 偶数月第4 精神科医相談 14:00～16:00 | | |

男性電話相談

生き方・家庭・仕事・健康等の悩み、男性相談員が対応します。

毎月第1・3土曜日 13:00～17:00

※つながらない場合は、少し時間をおいてかけ直してください。

※第1・3土曜日が休館日の場合、次の週の土曜日に相談を実施します。

専用電話 054-272-7880